

美術の実践発表

凹版版画・藍染料による染色・油彩画のマチエールと実制作

美術班：岡森 拓真・平田 まさみ

キーワード：ドライポイント 型染め 藍染料 マチエール

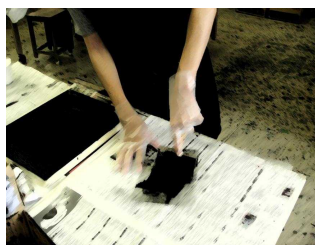
1. はじめに

小・中学校までの美術の授業では、主に鉛筆や水彩絵の具といった軽便な画材を使用してきた。高校においても、使用する道具の難度・作品の保管場所等を考えると制作に適した画材は限られてくると思うが、私たちの班では少人数ということもあり、普段の授業では扱うことの難しい3種類の画材に取り組むことができた。その画材の技法や制作過程の報告を美術班の発表としたい。

2. 3種類の実践(概要)

(1)ドライポイント技法による凹版版画

版画といえば彫刻刀で彫り進んでいく木版画をイメージすることが多いと思われる。版画には、凸判、凹版、平版、孔版の4種類があり、木版画は彫り残した部分にインクをつけて刷る凸版である。今回は凹版のドライポイントという技法に取り組んだ。ドライポイントは樹脂板にニードル(釘状の道具)で線刻し、凹んだ部分にインクを詰め込み、プレス機で樹脂板のインクを紙に押し写して刷る技法である。繊細な描線やぼかし表現が可能となる。



(2)型染め技法を使用した藍染料による染色

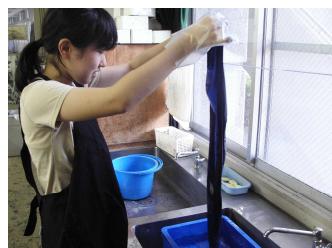
染色は、染料を繊維の中に染み込ませ繊維と結合させることによって表現する技法で、絵の具やペンキのように、表面に色を塗って着色するのとは大きく異なる。藍染料を使用して布を染めるが、藍染めの青い色は、「JAPAN BLUE」として世界に知られるほど深く鮮やかな日本の色で、作務衣や暖簾の染色にも使われてきた。今回は型染め技法で、文字を表現した。



型紙の切り抜き



糊を置く



藍液に浸し発色させる



(糊のない部分が染まる)

(3) 油彩画のマチエールと実制作

油絵の具は、絵の具の肉持ちが良く、すぐには乾かないので彩色後の加工が容易である。また画溶液(溶き油)と組み合わせることによっても、さまざまな表情をだせる。こういった画肌をマチエールという。今回の実践では、いろいろなマチエールを試したうえで、実制作をおこなった。画溶液(溶き油)は揮発製油と乾性油に分けられる。揮発製油では絵肌はあまり変わらないが、主に揮発製油を使うと画面に艶を出すことができる。塗り始めは揮発製油を使用するが塗り進めるに従って乾性油の量を多くしていく。またキャンバスに絵の具を塗る道具としては筆以外にペインティングナイフも多く使用される。

揮発製油と乾性油、筆とペインティングナイフ、そして力加減や描画方法を組み合わせながら、表現に応じたマチエールを工夫することが油彩画制作の面白さとなる。



様々な用途の画溶液



マチエールの練習



組み合わせて表現する



3. まとめ

今回、私たちが使用した画材は、いずれも扱いが難しく、自分の思った表現にならないこともあったが、常に新鮮な気持ちを持続して取り組むことが出来た。また、こういった未体験の画材を使用することで、造形表現の幅を広げることが可能となった。自分が表現したい内容に応じた技法や画材を選択出来るよう、色々な画材を体験し習熟しておくことが重要だと感じた。

4. 参考文献および参考 Web ページ

- ・ 版画芸術(阿部出版)、
- ・ やさしい草木染(日本放送出版協会)、藍染おりがみ紋(高橋誠一郎著)
- ・ 学研アートテクニック(横山了平著)
- ・ 版画の歴史 版形式について(女子美術大学版画研究室 HP)